「おしゃべりな背中と、聞く手のひら」

増田倫子　（50 代）

目は口ほどにものを言う、という。

では、背中はどうだろう？

夫の口は、多くを語らない。

仕事の愚痴を言っているのを聞いたことがないし、相当な激務のはずなのに「疲れた。」と口に出して言うことすらない。

これは、昭和生まれのアラ還男である夫の美学の成せる技なのか。

それとも、実は密かに言霊信仰を持っていたりするのか。

それに対して最近の私はといえば、「更年期だから。」を免罪符に、「あれがイヤ。」「これがイヤ。」。

しまいには、おでこに冷感シート、首にはタオル、手には扇子のいで立ちで、「はあー、せめて天気くらい味方してくれてもいいんじゃないの？」などと、お天道様に向かってまで毒づいてしまう。

まさに人生何度目かのイヤイヤ期真っ只中の私。

長年夫婦をやっているが、全く対照的である。

ネガティブなことを一切口にしない夫は、果たしてスーパーマンなのか？

いや、決してそうではない。

何故なら、戦国武将の甲冑さながらの仕事着をひとたび脱げば、一転して背中が饒舌におしゃべりを始めるからである。

見ると背中は、まるでしかめっ面をしているかのように背骨に対し左右非対称に歪み、右側だけが大きくもり上がっている。

すでに目視で、コリの存在を確認可能な状態だ。

そのコリをほぐそうと手を触れてみた途端、背中は堰を切ったように話し始める。

「今日は丸一日、座りっぱなしでデスクワークだったから、すっかりクタクタだよ。」

「スーツや革靴でビシッとキメようにも、つくづく体力のいる年になったなあ。」

「昼食べた揚げ物、うまくて食べ過ぎたかも・・・。」

私の手のひらは聞き役として、背中の声に耳を澄ます。

まずは血行不良でブヨブヨに固まった箇所を揉んでみる。

そしてコリの周辺の背骨や肩のツボを押してみる。

更にコリが酷いと、背中はもはや鉄板と化してしまっていることもある。

そんな時の背中は哀れなことに、青ざめて「苦しいー。苦しいー。」と悲鳴を上げている。

“よくこれで息が出来るな。”と心配しながら、“どうか回復しますように。”と念じつつ、自然療法家になったつもりで、お灸やこんにゃく湿布、アロマオイルも試してみる。

しばらくすると、背中はほっとした表情に戻る。

手のひらをそっと当ててみると、背中は静かに語り始めた。

「心配かけてごめんね。仲間たちと一緒に、手を動かして汗かいて、仕事に熱中するのってすごく楽しいんだ。もちろん苦しいときもあるけど、みんなで心を合わせて何かを成し遂げるのは、僕にとって大きな喜びなんだよ。」

背中は充実した様子で、とても誇らしげだった。

そのとき夫は、といえば、既に静かに寝息を立てていた。

夫よ。

きっと私は、口が悪いよね。

けれどその代わりに、この手のひらが話を聞くからね。

“明日も元気に行ってらっしゃい！”

言葉にはならない夫への感謝の思いを、温かな手に込める。